

【パネル展】移民画家 半田知雄が見た世界



展示概要

はんだ ともお
ブラジルで画家として活躍した半田知雄の作品を通して、
移住者の生活の様子を紹介します。

1908年にブラジルへの日本人の集団移住が始まり、その後、多くの日本人が渡航しました。初期の移住者の多くがコーヒー農園で働き、大変な環境のなかでも、家族やコミュニティの支えを受けて、力強く生活していきます。

日系画家の草分け的存在となった半田は、ブラジルでの体験をもとに、コーヒー農園での仕事や農村の生活風景などを描き、移住先での様子が分かる作品を多く残します。

コーヒー農園で働く労働者、原生林の伐採、農民の日々の暮らし、地方のお祭りの様子などの作品を通し、ブラジルへ渡った移住者に思いを馳せてみませんか。



はんだ ともお
半田知雄

1906（明治39）年生まれ。11歳のとき、家族とともにブラジルへ渡り、コーヒー農園で働く。14歳でサンパウロ市に移り、日本語新聞『ブラジル西爾時報』に勤務。活版印刷で文章を組む文選工として働くかたわら、絵の修業をはじめ。1935年、サンパウロ美術学校を卒業。初期移民としてブラジルに渡った自身の体験をもとに描かれた作品は、移民研究の貴重な史料として高く評価され、のちに画文集『ブラジル移民の生活』に一部まとめられた。大著『移民の生活の歴史』などをもって移民史研究にも貢献した。1996年逝去。享年90。